

りて柔かい枯草の中へ畫架を立て、自分は三脚なして稻叢へ
 靠れ懸かりながら前に有る稻叢の二ツ三ツと、中景の農家と、
 其の後の霞んだ山を小さひ畫面に入れて寫生しかかると、近く
 て風あげに餘念なかつた小供等が五六人、風を下ろして直ぐ寄
 つてくる、「やあ寫真を描い居らあ」と一人が言へば、「あら一チ
 ヤン處、の家を描いて居るよ」と彼の農家を指さして云ふ、傍
 を通る人が皆立止つて見て行く、西の空が少し黄ばんで彼の家
 も少し霞できた頃、夕ツチを入れ終つてパレットを洗うて居る
 と、田の向から友が一人、三脚をふり廻わしながら「やつてる
 のかれ」と聲を懸ける、「最う仕舞かれ」と、すぐ畫架のそばへ寄
 つてきて畫面と向ふを見くらべて、「一寸此處も善い處だれ、僕
 はそら彼處の森を描いたよ」と、今描いた家の左手の森を指さし
 ながら、スケツチ箱を開けて見せる、豆腐屋がりんをならして
 わきの道を通つて行く、「君最う歸へらうじやないか」と、友
 をうながして畫架をたゝむと、彼の家からポト白く夕煙が上
 った。

日本水彩畫會新會友

福岡縣三池郡渡瀬	山口
新瀉縣三島郡出雲崎町	高橋浦次郎
栃木縣日光町鉢石町	星野長一
福岡縣鞍手郡木屋瀬町	立石録太郎
大阪市東區農人町二ノ七十五	大隅直造

御わび

十二月の末に、年賀状は一括して特別扱に托し、伊豆に旅行し
 て歸つて來たのは一月の七日、翌朝、諸君からよせられた澤山
 の賀状を拜見してゆくうちに、まだこちらから差上ない分を區
 別して見たら、實に四五寸の高さに達した、確に三四百枚はあ
 りませう、その中には叮嚀な繪の畫いてあるのも少なくはない、
 そしてその多くは未見の方であつて、多分本誌の愛讀者諸君と
 推察し、御厚意を深く感謝しました、それで、宿所の分つてお
 る方へは、早速に答禮を申上るつもりでゐたところ、留守中の
 雑務はある、來客はある、新年會だ、送別會だ、晚餐會だ、何
 の角のと事繁く、一日々々と延引してゐるうちに、最早本誌二
 月號の編輯の時が來てしまいました、正月も半なかばを過ぎた今日、
 年始状であるまいと（實はあまり澤山で手のつけられぬので）、
 今年に此誌上で御わびを申上て置いて、諸君に失禮いたす事にし
 ました、あしからず御許容を願ひます、諸君の賜はりし御賀状
 は、永く保存して、御厚意はいつ迄も忘れませむ。

四十三年一月

大下藤次郎 敬白